

大学教育の変容と学生支援のデザイン

京都産業大学 川島 啓二

変容し続ける大学教育と学生支援

十八歳人口の減少、IT化、AIの進展、グローバル化といった大きな周辺環境の変容は言うに及ばず、大学における「学習」の在り方についての変革、さらに、それらを背景としていると思われる学生たちの意識や行動の変化を受けて、我が国の高等教育が激動期にあることが、今まで幾度となく、そして、様々な機会や媒体を通して語られてきた。そのことと学生支援との関連についても、我々調査分析チームが、各調査結果を踏まえつつ分析・整理しながら繰り返し語ってきたところである。学生支援の歴史は、時代を反映した新しい問題への対応の歴史でもあった。いわゆる大学全入時代を背景とした「学力低下」、学生の多様化、文化や意識の変化、大学生活への不適応、対人関係の悩み、消費者としての問題、就職活動時期のタイト化や就職活動スタイルの変化等、すべてを挙げるのは不可能であろうし、それらを体系的に整理するこ

生を位置づけること、つまり、学生として尊重され支援されて大学生活のパフォーマンスを高めていくという「学生支援観」をさらに発展させた、大学時空間ネットワークの中の、（学生が）主要なアクターとしてのプレゼンスを発揮する学生支援枠組の形成とでもいえるような考え方が求められているのではないだろうか。敷衍すれば、（組織はその構成員によって形成されるという立場にたてば）そのことは既成の大学組織観への問題提起を孕み、新たな組織モデルを求めることにもなるであろう。

そのことと関わって、本連載から四点ほど、着目しておくべき視点を提示しておきたい。

まず、本連載③④でも触れられた、組織体制や専門人材の在り方である。学生支援に限らず、大学教育改革全体の中で、学生支援担当を含む専門人材養成の方法と運用が重要な課題となってきたているが、学生支援の問題の複雑さや錯綜の度合いは、課題とそれに対応する人材との「一対一対応型」の取組の運用の困難さとそれゆえにこそその重要性を示唆しているのではないか。であるからこそ、関係教職員間の情報共有や組織・部署間連携の重要性とその運営・機能がキーとなるのである。これは、学生支援の各領域間の問題でもあるし、領域内の部署間・教職員間の問題でもある。まさに、学生支援の組織マネジメントのありようが問われているのである。

第二に、言い慣らわされたことではあるものの、学生の多様性のより一層の進展である。それは、支援対象の広がりや多次元化であり、また支援方法の多様化や、かつての制度・手

とも難しい。

ただ、社会変化が学生にとっての大学生活の安定性を損なう原因になるとすれば、そのようなリスクを避けるべく、大学等の機関が対応する施策を打ち出すのは当然であって、その限りにおいては「厚生補導」の考え方が共有され続けている。その意味において、学生支援は「厚生補導」の時代から連綿と続く責任と機能を有し続けているといえる。

かつて肝要であったことは、援助を必要としている対象（学生）に対して、適切なサービスや援助を提供することであり、求められることは、そのサービスや援助の調達と提供であり、その質の維持・向上と管理であった。必要なサービスや援助が、それを必要とする対象に対して届けられること、もしくは必要とするものが活用できることが重要であったのであり、デリバラブルなものとして提供されたサービスは「消費」されるものでもあった。学生支援が、student personnel serviceの概念を取り入れたものとして戦後我が国に

法の「再発見」及び現代的定位であったりする。例えば、前者については、連載⑩で取り上げられた発達障害学生やLGBT（性的少数者）の問題であり、後者については、連載⑦⑧における、グローバル化や学生のコミュニケーション力の育成をも見据えた、学生寮の整備・活用の問題であったりする。さらに付言すれば、支援に携わる教職員の専門的職能開発や、多様な専門人材の活用という、今日の高等教育政策イシューとの交差を見出すこともできる。

第三に、大学教育改革の全体的潮流における、（とりわけ汎用的技能や態度に焦点化された）学生の資質・能力向上の機能が、学生支援に（主目的ではないものの）織り込まれざるを得ない現代的状況がある。そもそも汎用的技能や態度の育成プログラム自体が困難でありながら、今までの中教審査等においては、正課授業以外でのキャンパスライフ全体でもその育成が期待されていることから、もともとは、大学教育の「脇役」にすぎなかった学生支援への注目が高まってきたともいえよう。ただ、そのようなアプローチが、教職員の理解を伴った実効性を持つためには、大学全体として学生支援に関する方針が明示され、大学全体の教育方針との整合性が担保されなければならない。大学教育界全体の大きな潮流と、学生支援の現代的変容は好むと好まざるとに関わらず、密接な関係にあるといえる。

最後に、学生支援にかかる大学間連携の取組である。本連載における典型的な例としては、連載⑥で取り上げられた、横浜市立大学

導入された経緯をみれば、文字通りサービスを必要とする学生個人が、その提供を受け取り、活用し、消費して学生生活の「成功」に結びつけるという構図が想定されていた。その意味において、学生支援は輪郭をクリアに描くことのできる世界であったともいえよう。その回路が今後も守られ続けなければならぬことは言うまでもない。

学生支援の新たな動き

ただ、大学教育自体が、大きく構造的に変動している時代である。新たに現出している問題を取り込みながら、どのように学生支援の全体デザインとマネジメントを、各大学が構築・機能化させていくのが現在大きな課題となっているのである。かつて、広中レポート（大学における学生生活の充実方策について（報告）―学生の立場に立った大学づくりを目指して―）（平成十二年八月）において、「学生中心の大学」という理念が掲げられたが、その当時と比べれば、別の次元で学

を中心とした「就職支援パートナーシップ制度」があげられよう。（加盟大学が、事実上公立大学に限定されているという現状があるものの）これまた、学生支援に限らず、教育・研究の幅広い分野での大学間連携や地域創生への貢献が、政策的にも推奨されている背景もあり、現場の教職員の問題意識から出発したとされる同制度が、大学の枠を越えた協働の在り方として、どのような成果をあげているのか、今後の動向が着目される。

学生支援への構想力

今次調査あるいは先行するJASSO調査から我々は何を読み取り、今後の指針として何を見出すべきなのか。少なくとも抽出できる何らかの傾向はあるのか。その背後に横たわっているより本質的な事柄は何なのか。もし、学生支援の内実と機能の変化を看取できるのであれば、新たな時代の学生支援の在り方について、我々はどのような構想力を持つことができるのであろうか。

平成二十五年度調査報告書において、筆者は以下のように指摘した。

「我が国の高等教育がユニバーサル化段階に入ったと言われるようになったのは、そう直近のことではない。それ以来、大学等の高等教育機関はそれぞれ自組織において、学生のようなニーズへの対応や、学生支援のための組織、施設の拡充、そこで提供されるサービスの充実に向けて、より一層積極的な取り組みを展開する動きが顕著になってきた。また、それらの学生支援の取り組みは、大学教育のパフォーマンスや学生の人的成長と深

く関わることから、大学等の本来の教育機能との有機的連関も課題として認識されるようになってきた。学生支援は、このように立体的で複雑な構造の中で、経営層、教員、職員、学生は言うに及ばず、学費を負担する父母、さらには高校生や高校教育関係者といった大学の周辺に位置するアクターやステークホルダーにとっても益々重要な関心事となつてきており、自機関の取り組みが、全国的な傾向や潮流の中でどのように位置づくのか、自機関の学生支援の考え方や方針を明確化させて今後の改善に生かすためにも、客観的かつ包括的なデータを参照することが求められている。」

大学教育の目的が、ディシプリンの知識体系を伝達することにとどまるのではなく、学生が「何ができるようになったのか」を問うアウトカム重視を基軸とすることが、我が国において、明確に求められるようになってから、すでに一〇年ほどの歳月を経ている。アウトカム重視は、知識・技能のみならず、汎用的技能や態度・志向性までカバーするものと捉えられ、学士課程教育改革が学生の人間の成長をも求めるものとみなされるようになってきた。そのことを学生支援の文脈に引き寄せて考えれば、メンタルな領域に直接にコミットメントする学生相談はもとより、キャリア意識の醸成を目指すキャリア教育につながる就職支援等、ひいては、修学支援に至るまで、学生支援はもはや、学生の成長を担保するための学士課程教育改革の基軸と不即不離の関係に立ち至っているともいえよう。

また、最近の学生支援はそのマネジメント

が注目され、大学経営全体との関連も意識され始めているように思える。このことは、受験者数減少への対応といった単純な問題ではない。連動する学士課程教育改革のシステム志向性も相俟って、各大学における学生支援全体の戦略性や体系性、組織の実施が求められるようになってきているのである。学生支援は、もはや領域別の「個別課題の総和」という段階を越えてしまっているといえるだろう。

一方で、学生支援に係る調査分析とその整理は、各個別課題における漸進的改革や変化についての地道で倦むことなき根気の連続であるともいえる。それらの軌跡と意味を記録する作業の中で、新たな構想力をどのように促していくのか、課題はまだ続くと言わなければならぬ。

学生支援の新しいデザイン

少し大きな問題に踏み込むことになるが、学生支援は、学生の学業や生活とそのプロセスという観点から考えれば、大学という時空間の新たな構成概念を意図せずして模索してきたのかもしれない。実際のところ、本調査でも垣間見ることのできた事例や実践から、大学という社会の中で、社会的・公共的な枠組、またある場合にはセーフティネットとして、何が可能な在り方なのかという点について、学生支援の取組は巧まらずしてその可能態を表現しているのかもしれない。このような、実践が紡ぎ出す「組織」||コミュニティ・オブ・プラクティスは、知識社会における新しい組織論として、近年注目を集めていると

ころでもある。

また、情報の共有や関係者間での連携は、セグメント化されていた活動内容が、学生支援という媒介項を通して、その新しい組み合わせやユーザーが求めるニーズとその問題定義(サービスマネジメントと称される領域)というアプローチにもつながる。であれば、学生支援は、大学教育に関わるブランニューでダイナミックな表象を我々に提供するものになっているのかもしれない。今次調査においては、参考となる実践例がヒアリングの結果とともに提示されたが、その多くが各大学の実情や文脈をふまえたプロトタイプ(試行)であった。実際のところ、学生支援の実態はプロトタイプの積み重ねである。アンケート調査結果による定量的な全体像とこのような特徴あるプロトタイプの萌芽的実践とを併せ見るとき、制度的枠組の中での、今までの地道で膨大な積み重ねを持つ「厚み」と、生き馬の目を抜くような現代社会の変動への果敢な対応との対比に、悩ましさを越えて肅然とした思いさえ感じたところであった。

現在、平成二十九年度調査の集計と整理が進行中で、有り難くも各大学からのご協力を頂戴したとのことである。我が国の学生支援の内容と方法について、時間的経過とともにその相貌を描いてきた本調査は、これまでの各大学の一方ならぬご協力があったその賜物である。調査結果をご活用いただいで学生の成長につなげるために、引き続きのご理解とご協力を心より希うものである。 ▣